

## S.1519V 「寺院收藏文獻目錄(擬)」に見る 10世紀敦煌の講唱體文獻\*

高井龍

### 序

中國では、佛教が西方より伝えられて以来、私撰と敕撰とを問わず、多數の佛教文獻目錄が作られてきた。それらは譯經史學に重きを置いた代録と、大乘や小乗、經律論に分類して論藏の標準を示した入藏録に分けることができる。このうち入藏録は、『法經録』をはじめとし、それぞれの編纂時代における經典收藏狀況を窺わしめるものである。六朝時代までの入藏録は、國家の分裂も起因して、各地に存在する經典が中國全土に行きわたったわけではなく、邊境地域の寺院で編纂された入藏狀況も、中原の寺院の入藏狀況と一致するものではなかった。しかし隋代になると、國家の統一とともに、各地に存在する經典の整理が進み、複數の經録が作成されていく。唐代に至っては、『大周刊定衆經目錄』や『大唐內典録』、更には『開元釋經録』等、國家の軌範となる經録が陸續と編纂されていくことで、各地方寺院が入藏すべき經典の基準も確立されたのであった<sup>1</sup>。

しかし、入藏録を考えるにあたっては、幾つかの問題を念頭に置いておく必要がある。例えば、安史の亂や黃巢の亂によって唐が衰退し、また滅亡へと向かっていく時期になると、『大唐內典録』や『開元釋經録』等の軌範的經録に基づく文獻の入藏は、各地方寺院にとって容易な作業ではなかったことである<sup>2</sup>。相繼ぐ戰

\*大英圖書館での寫本調査にあたり、IDPのSam van Schaik氏の協力を賜った。また、本稿執筆にあたり、2013年6月19日の發表時、諸先生方より多數の御教示を賜った。ここに、厚く謝意を表す。

<sup>1</sup>入藏基準ができあがったとはいえ、『開元釋教録』を基準する經典の入藏が實際に廣く行われるようになったのは會昌の廢佛以降とされる。方廣箴輯校『敦煌佛教經録輯校』(敦煌文獻分類録校叢刊)江蘇古籍出版社、1997年。同『中國寫本大藏經研究』、上海古籍出版社、2006年。

<sup>2</sup>10世紀においてもその狀況は續く。岡部和雄氏は、乾德2年(西曆964年)の識語を持つS.2142「某寺點勘藏經內現有部訳目錄(擬)」を取り上げ、「歸義軍時代の敦煌の經藏が、基準とすべき經録ももたないまま、かなり衰微した状態にあったことがこの目錄によってうかがわれる。」と述べ

亂の中で失われた經典を近隣の寺院や他地域の寺院に求めるとしても、その入手は常に叶うことではない。また、入藏録に沿って點勘した佛教文獻以外にも、實際には、多分野に亙る文獻が各寺院に多數收藏されていたことも忘れてはならない。9、10世紀敦煌について言えば、寺院は在俗信者が教育を受ける場としても開かれており、俗文學作品や童蒙書をはじめ、彼等が用いていた非佛教文獻がよく窺われる<sup>3</sup>。

本稿は、これらの一般的な入藏録の性格を踏まえ、敦煌文獻 S.1519V「寺院收藏文獻目録（擬）」に挙げられた文獻名のうち、特に講唱體文獻の特徴を考察するものである。當該文獻は前半部分が破損しており、かつ22行しかないため、十分な記録を残す寫本とは言い難い。しかし、その一方で、通常の入藏録以上に詳しい入藏状況を窺わせるものとなっている。上述の如く、一般的な入藏録が、當時の軌範となっていた經録に沿った入藏の點勘であり、佛教文獻のみが取り上げられているのに對し、S.1519Vは、佛教以外の文獻をも列挙しているためである。その結果、10世紀敦煌寺院において實際に收藏されていた様々な文獻を我々に伝える記録となっている（S.1519Vが10世紀文獻であることは後述する）。筆者はそこに挙げられた文獻名を見ていくことで、10世紀敦煌の講唱體文獻に繋がる典籍が、當時の目録にいかんにか位置付けられていたかについても考察すべき課題が含まれていることが分かった。本稿では、これらの問題について考えるとともに、當時にいう「經」が特に講唱體で書かれている場合、いかなる性格を有していたかについても併せて考察を加えたい。

第1章では、S.1519Vの基礎的情報をまとめ、翻刻と注記を提示する。また、Rectoの記述に着目することで、この入藏状況が三界寺の記録であった可能性が高いことも、併せて指摘する。第2章では、第1章の翻刻をもとに、そこに挙げられた幾つかの文獻名と10世紀講唱體文獻との関わりを考察する。ここではまず『賢愚經』や『雜寶藏經』の佛教因緣譚、及び彌勒上生信仰に着目する。續いて、變文と近い位置付けが行われることもある『十王經』を取り上げる。當該文獻に記された名稱と敦煌文獻中の『十王經』との相違、及び當該文獻にその名稱が見られることの意義について考える。第3章では、講唱體文獻の中でも、「經」と名付けられた典籍が果たして本來經典と呼ばれるべき典籍であったのかを考察し、10世紀敦煌における「經」に對する意識を明らかにする。それにより、S.1519Vに列

---

る。牧田諦亮・福井文雅編『講座敦煌7 敦煌と中國佛教』岡部和雄「十四 敦煌藏經目録」、大東出版社、1984年、297-317頁。他にも、長興5年（西曆934年）に三界寺僧道眞が經典の不備を補わんとした記録がある（敦院345「三界寺藏内經論目録（擬）」）。これも10世紀における藏經の不完全さを示すものである。

<sup>3</sup>伊藤美重子「敦煌の學郎題記にみる學校と學生」『唐代史研究』第14號、2011年、42-70頁。

擧された幾つかの文獻を考えるにあたって、看過できない「經」の問題と特徴を指摘する。これらの考察を踏まえ、最後に S.1519V に示される收藏文獻目録の特徴とその限界を考えたい。

なお、寺院が收藏する文獻の目録は、一般に入藏録と呼ばれる。しかし、S.1519V は規範的經録に沿って佛教文獻の所藏状況を點勘したものではなく、非佛教文獻も列擧している點で、通常の入藏録とは大きく性格を異にしている。そこで本稿では、特に「寺院收藏文獻目録（擬）」と稱し、一般の入藏録との區別を行なうこととする。

## 第1章 S.1519 寫本紹介・翻刻・注記

當該寫本の Recto は破歴である。内容上、Verso の收藏文獻目録との關係は窺われない。

S.1519

Recto：破歴

首題：無

尾題：無

存：46行

解説：「辛亥年十二年七月」、「壬子」等の記年あり。

Verso：寺院入藏文獻目録（擬）

首題：無

尾題：無

存：22行

解説：『敦煌佛教經録輯校』<sup>4</sup>に翻刻あり。

敦煌文獻に確認される經録のうち、幾點かは眞題を有しているが、當該寫本には眞題は見られない。

ここではまず、Recto の書寫年代と文獻所藏寺院について見ていくこととする。

Recto には、「辛亥年十二年七月」や「壬子」等の記年が見られる。方廣箴氏は、これらの記年が大順二年（西暦 891 年、辛亥）と景福元年（西暦 892 年、壬子）を指すと述べていた<sup>5</sup>。この見解は、次の點からも妥當性が認められることが分かった。

「辛亥年十二年七月」の後ろには、「直歲法勝所破油麩歴」との文が繼續書寫されている。實は、この法勝なる人物の名が、9 世紀末から 10 世紀初頭に書寫され

<sup>4</sup>注 1 『敦煌佛教經録輯校』、518-521 頁。

<sup>5</sup>同上。

た S.2614 「敦煌諸寺僧尼名簿（擬）」<sup>6</sup>に確認された。そして、その記述より、法勝が三界寺の僧侶であったことも分かる。このことは、S.1519 が三界寺の寫本であったことを意味している。

S.2614 の書寫年代が 9 世紀末から 10 世紀初頭である以上、S.1519 の書寫年代も、方氏の指摘以外の辛亥と壬子に當て嵌めることは難しい。S.1519 に對する方氏の推定年代は適切なものと言える。

よって、本稿の扱う Verso の收藏文獻目録は、9 世紀末以降、概ね 10 世紀の記録と見做すことができるだろう。

ところで、Recto が三界寺の記録であることから、Verso の「寺院入藏文獻目録（擬）」も三界寺の文獻目録である可能性が高くなる。しかし、Verso の記述からは、それを證明するに足る内容までは確認できていない。本稿においては、S.1519V を 10 世紀三界寺の目録と斷定せず、10 世紀敦煌某寺の收藏文獻目録として扱うこととする。

さて、當該文獻の録文は既に方氏も發表している。しかし、寫本の文字は均整に書かれておらず、また擦れたりしているため、これまで出版されてきた圖録資料では読み取り難い箇所が複数あった。筆者は 2012 年 12 月、大英圖書館での實見調査の機會を得て、その一部を補うことができた。本稿では、まずその翻刻を提示するとともに、若干の注記を添えてこの寫本の内容紹介を行う。なお、本稿末にその圖版を附す（圖 3）。併せて参照頂きたい。

S.1519V の内容は以下の通りである。

#### S.1519V 翻刻

1. 《注觀音經》一卷 《韋提希經》一卷
2. 《一切經音義》卷第十 又《經音義》卷第三
3. 《注聲聞戒》一卷 《雜寶藏經》第五
4. 《賢愚經》《波斯匿王女〔金剛〕緣》二卷〔1〕
5. 《佛頂尊勝陀羅尼經》一卷
6. 《雜寶藏經》第二 《佛說耆婆治病
7. 經》一卷〔2〕 《佛垂般涅槃略說教戒（誠）經》一卷
8. 《六門陀羅尼經》一卷 共一訳
9. 《華嚴經内章門等雜孔目》卷第一

<sup>6</sup> 『敦煌遺書總目索引新編』（敦煌研究院、2000 年）には、Recto を變文とし、Verso を僧尼籍とする。しかし、正しくは、先に僧尼籍の名簿が書かれ、その後に Verso の「大目乾連冥間救母變文」が書かれている。なお、「大目乾連冥間救母變文」には西曆 921 年の識語がある。藤枝晃「敦煌の僧尼籍」『東方學報』第 29 冊、1959 年、285-338 頁。荒見泰史「敦煌の喪葬儀禮」『敦煌寫本研究年報』第 6 號、2012 年、27-40 頁。

- 10.《法王東流傳》一卷〔3〕 《華嚴經章門雜孔目》第一
- 11.《新譯大方廣佛花嚴經音義序》一卷
- 12.《講金剛疏》欠一卷 《戒式篇》一卷 《維摩序》〔4〕
- 13.法勝破歷〔5〕 《佛八十相好》一卷
- 14.《維摩疏》 同一訳
- 15.《上生經疏》上下兩卷 《因明疏》第一卷 《上生經》一
- 16.《上生抄》一卷 爲一訳
- 17.《維摩天台抄》 《番(蕃)字漢字經名》一卷〔6〕
- 18.《梵字經千文》三本 《閻羅十王變》一
- 19.《彌陀念佛讚經》一本
- 20.《字母圖》四本 一束 同 賦
- 21.《百法要決》及《橫飛》兼《百法 觀》 同束
- 22.《九匀圖》并《因明論》

[注記]

〔1〕「波斯匿王女金剛品」は、決して長編ではない『賢愚經』中の一編の因縁譚である。些か疑問が残るが、二巻に分けて收藏していたのであろうか。

〔2〕『佛說耆婆治病經』の詳細は不明である。なお、耆婆は古代印度の名醫であるとともに、かつて父・頻婆娑羅王の殺害を悔いた阿闍世に對して釋迦に會うよう勧めた人物である。

〔3〕敦煌文獻中に確認される「法王本記東流傳録」を指すか。

〔4〕このあたりは紙が變色しており見にくいのが、「維摩序」と2行に書かれている。『維摩經』は本來序文を有しておらず、通常は「維摩序」は東晋・僧肇が作成した『注維摩詰經』所收の序文を指す。しかし、ここにいう「維摩序」は、9世紀敦煌において寺院での教學に利用され、敦煌文獻中にも多數の殘存狀況が確認される道掖撰『維摩疏釋前小序抄』を指す可能性も高い。

〔5〕これは Recto の破歷の内容を示したものである。よって、筆者はこれを Verso の收藏文獻の1つには數えない。なお、この4字の書寫時期が Recto の書寫時期と一致するか、また Verso に擧げられた各文獻名の書寫時期と一致するかは詳らかにしない。

〔6〕この文獻の詳細は不明である。その名稱から考えるに、佛教經典の名をチベット文字と漢字で併記した文獻である。恐らくは、經典のみならず、律や論も含んでいたであろう。敦煌が吐蕃支配期に入って以降、敦煌の僧侶が作成した文獻である可能性が高い。

先述の如く、この「寺院收藏文獻目録(擬)」は、『大唐内典録』や『開元釋教録』のような特定の經録に基づいた入藏録と異なり、10世紀に敦煌の某寺院が收藏していた文獻を、順次書き記したものである。『字母圖』のように、本來音韻關連資料と思われる文獻や、『番(蕃)字漢字經名』のように、敦煌で作られた可能

性の高い文獻も含まれている。また、同じ經典でありながら、巻数が違うために別々に列挙されている場合があることも、この目録の特徴の一つと言える。このような点からも、当該收藏文獻目録が一般的な入藏録と性格を異にしていることが指摘できる。

## 第2章 S.1519V と 10 世紀講唱體文獻

敦煌文獻中の講唱體文獻は、確認される識語が全て 10 世紀であることから、その流布の時期も概ね 10 世紀と推定されている。これは、S.1519V の書寫時期と同時代とも言い得ることから、兩者の間に何等かの連絡する特徴や性格が確認されても怪しむことではない。以下、『賢愚經』や『雜寶藏經』に所收される佛教因縁譚と彌勒上生信仰に着目して、兩者の連絡する点を見ていく。そして、講唱體文獻と近い位置づけにある『十王經』が、どのように收藏されていたかについても、併せて考察する。

### 1. 『賢愚經』（4 行目）

『賢愚經』は、『雜寶藏經』や『撰集百緣經』とともに、佛教因縁譚を多數収録した經典である<sup>7</sup>。その中でも『賢愚經』は、敦煌佛教文學、特に變文との関係が極めて密接であることが指摘されてきた<sup>8</sup>。また、歸義軍時代の文獻と思しい俗講の儀式次第を記した P.3849V の冒頭に、「佛說諸經雜緣喻因由記」という名稱のもと、『賢愚經』に基づくところの多い因縁譚が多數列挙されている<sup>9</sup>。ここにもまた、『賢愚經』と 9 世紀半ば以降の敦煌佛教界との強い連絡が窺われる。このような点に着目すると、S.1519V に『賢愚經』の名が見られることは、講唱體文獻の流行した 10 世紀敦煌寺院の收藏文獻目録として相應しい記述と言えるだろう。

さて、この 4 行目の記述からは、当時『賢愚經』「波斯匿王女金剛緣」が存在していたことはもちろん、その單行本が敦煌に行われていたことが指摘できる。だが、その前後に列挙された文獻と比較すると、これは些か特殊な書寫方法である。当該文獻目録では、經典中の 1 點の故事の單行が他に確認されないためである。そもそも、經典の一部を抄出することや、その抄出した經典を幾つか併記すること

<sup>7</sup> 『國譯一切經』本緣部七「賢愚經解題」（赤沼智善・西尾京雄）大東出版社、1930 年、64 頁。

<sup>8</sup> 金岡照光『敦煌の民衆 その生活と思想』、評論社、1972 年。金岡照光編『講座敦煌 9 敦煌の文學文獻』II 各説、岩本裕「一、敦煌における佛傳・本生譚」、大東出版社、1990 年、429-458 頁。なお、『賢愚經』の本生譚は莫高窟壁畫にも多數描かれている。

<sup>9</sup> 説話文學會編『説話から世界をどう解き明かすのか：説話文學會設立 50 周年記念シンポジウム [日本・韓國] の記録』荒見泰史「敦煌本『佛說諸經雜緣喻因由記』の内容と唱導の展開」、笠間書院、2013 年、148-173 頁。

はあっても、經典中の1點の故事だけを取り出し、それを他の一般的な經典や他の文獻と同列に並べて扱うことは珍しく、通常の經錄にはあまり見られない記述方法である。この考えが正しければ、この故事が、當時の敦煌において些か特別な位置にあったこと、そのために、このように經典等と併記されたと推察される。實は、この見解は次のような特徴とも繋がる點で、決して單なる推測に留まるものではない。

當該故事は、過去世において辟支佛を罵った口過の因縁により、醜く生まれ変わった女性・金剛の因縁譚である。金剛は、生まれて以來、その醜陋さ故に身内からも忌避され、長らく軟禁されていた。しかし、母の取り計らいにより、王郎なる人物と結ばれる。その後、過去生での口過を釋迦に懺悔することで、絶世の美女に変わった。この故事は、『賢愚經』だけでなく、『雜寶藏經』「醜女賴提緣」や『撰集百緣經』「波斯匿王醜女緣」等、複数の經典に確認されており、佛教因縁譚の中でも比較的良く知られた故事であった。更に、10世紀敦煌文獻では、この故事を講唱體で書き下ろした寫本が5點(S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3048、P.3592V)確認されている。それぞれ眞題に若干の異同があり、中でもP.3048は内容にも大きな書き換えが行われているが、いずれも同じ故事である。また、5點という寫本の殘存数は、目連を主題とする文獻ほどではないものの、敦煌講唱體文獻の中では比較的多い部類に屬する。當時の敦煌で廣く流布した故事であったと言える<sup>10</sup>。

この講唱體で書かれた金剛の故事は、同系故事を扱う複数の經典の中でも特に『賢愚經』と密接に関わっている<sup>11</sup>。つまり、9世紀末、恐らくは10世紀の收藏文獻の狀況を示す當該目録に、『賢愚經』「波斯匿王女[金剛]緣」という文字が確認されること、及びその單行本が經典等と併記されていることは、10世紀に講唱體で書かれた當該故事の流布と大いに連絡するものと考えられるのである。

## 2. 『雜寶藏經』(3、6行目)

『雜寶藏經』の名は2箇所に書かれており、「卷第二」と「卷第五」が收藏されていたことが分かる。『雜寶藏經』も『賢愚經』のように廣く流布した經典であり、敦煌文獻においても、P.3000「諸經略出因縁卷」のように、『雜寶藏經』の孝に関わる故事を抜粋し、講經の臺本のように用いたであろう寫本が殘されている<sup>12</sup>。それではS.1519Vに見られる2つの巻に、何らかの特徴が読み取れるのだろうか。

「卷第二」には、上掲『賢愚經』「波斯匿王女金剛品」と同じ故事である「波斯匿

<sup>10</sup> 拙稿「金剛醜女緣」寫本の基礎的研究、『敦煌寫本研究年報』第5號、2011年、257-285頁。

<sup>11</sup> 早くは次の論文に指摘がある。傅芸子「《醜女緣起》與《賢愚經・金剛品》」、『藝文』第3卷第3期、1943年。(後、周紹良・白化文編『敦煌變文論文録』(上海古籍出版社、1982年)に轉載。)

<sup>12</sup> 那波利貞「俗講と變文(中)」、『佛教史學』第1卷第3號、1950年、73-91頁。

王醜女頼提縁」の他、孝を題材にした因縁譚が複数所収されている。しかし、「巻第二」の名が見られることと講唱體文獻との間に直接的な関係を見出すに足る記述は確認されない。

一方、「巻第五」が挙げられていることは、些か注目に値する。この巻には22の因縁譚が所収されており、特に女性を主題とするものが多いためである。その一部を挙げれば、「天女本以華鬢供養迦葉佛塔縁」、「天女本以受持八戒齋生天縁」、「天女本以燃燈供養生天縁」、「天女本以華散佛化成華蓋縁」、「女因掃地見佛生歡喜生天縁」、「婦以甘蔗施羅漢生天縁」、「貧女從佛乞食生天縁」、「長者婢爲主送食值佛轉施生天縁」等がある。八戒齋を題材にした故事を含む點も、10世紀敦煌に廣く行われていた儀禮に繋がる内容と言える<sup>13</sup>。他にも、この巻には夫婦を題材にした「長者夫婦造作浮圖生天縁」や「長者夫婦信敬禮佛生天縁」等があることも着目してよいだろう。

「巻第五」が女性を題材にした巻であることに着目するのは、10世紀頃の敦煌では、先にも取り上げた5點の「金剛醜女縁」の故事やP.2553「王昭君變文(擬)」、S.133V「秋胡變文(擬)」をはじめとして、女性を中心にした故事が多數現れ始めており、また女性が多數参加した法會の存在も確認されているためである<sup>14</sup>。

『雜寶藏經』の「巻第五」が收藏されていることに、このような當時の敦煌の特徴と近い関係にあると見ることは、先の章にも見たように、當該收藏文獻目録が、當時の佛教界の傾向を反映する點からしても可能であると思われる。

### 3. 『上生經』(15、16行目)

S.1519Vの15行目と16行目に確認される『上生經』は、正しくは『觀彌勒菩薩上生兜率天經』と呼ばれる。これはまた、『彌勒下生佛經』と『彌勒大成佛經』とともに、彌勒三部經を成す經典である<sup>15</sup>。その前後に挙げられた『上生經疏』と『上生抄』は、その注疏と抄出本である。つまり、『上生經』の本文、注疏、抄出本がそれぞれ1部ずつ入藏されていたことが分かる。抄出本が作られていたことも、『上生經』の受容を窺わせるものと言えるだろう。そして、これら3點とも

<sup>13</sup>10世紀敦煌を代表する僧侶・道眞が在俗信者の授戒や燃燈會に関わっていたことも重要である。高崎直道・木村清孝編『東アジア佛教とは何か(シリーズ・東アジア佛教I)』土肥義和「特論：敦煌の社會と佛教 九・一〇世紀の莫高窟と三所禪窟と敦煌佛教教團」、1995年、春秋社、245-271頁。

<sup>14</sup>荒見泰史「講史類變文とその空間」『軍記と語り物』第48號、2012年、30-40頁。また、P.2133「妙法蓮華經講經文(擬)」にも、講經の場に女性がいることを想定した文言が確認されている。中村瑞隆編『法華經研究8：法華經の思想と基盤』野村耀昌「敦煌變文に見る脇門品の形態」、平樂寺書店、1980年、337-388頁。

<sup>15</sup>参照：松本文三郎『彌勒淨土論・極樂淨土論』(東洋文庫747)、平凡社、2006年。『國譯一切經』經集部二「彌勒三部經解題」(小野玄妙)、大東出版社、1933年、1-15頁。

に『因明疏』が挙げられている。この『因明』は、正しくは『因明入正理論』であり、玄奘によって中國に將來された典籍の1つである。また、慈恩大師基による注疏『因明入正理論疏』も大いに世に行われていた。ここにいう『因明疏』は、慈恩大師の注疏を指すと考えられる。瑜伽唯識の開祖・彌勒が長らく彌勒菩薩と混同されていたことを踏まえれば<sup>16</sup>、ここに『上生經』3點とともに一説とされていることも怪しむに足りない。

ところで、敦煌文獻中『上生經』の寫本は多くない。以下に『上生經』、及び『上生經』関連寫本を挙げる<sup>17</sup>。

・『觀彌勒菩薩上生兜率天經』(異稱を含む。)

S.650、S.3024、S.3807、S.4607、S.5555a、P.2071a、P.2373、P.3093、P.4535、Dx1296、BD4161、BD5812、BD2138、BD4049、BD1491、BD2155、BD6642、  
上圖4、北大D75、散1213、散1603、龍谷大學藏64、中村不折藏72。

・注疏

BD8222、P.2844

・講經文

P.3093

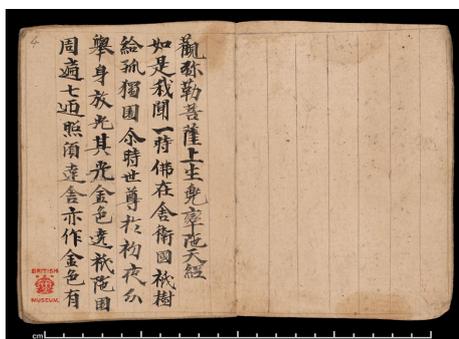


圖1：S.5555 『觀彌勒菩薩上生兜率天經』

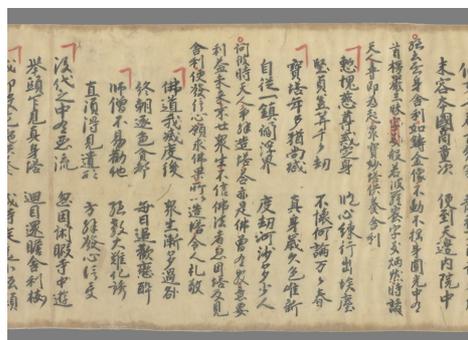


圖2：P.3093 『佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經講經文 (擬)』

このうち約半数に及ぶ11點(S.650、S.3024、S.3807、P.2373、P.4535、BD4161、BD5812、BD2138、BD1491、北大D75、中村不折藏72)が寫經本である。また1點(S.4607)は1行の字數を若干崩すが寫經に準ずる形式で書寫されている。

残りの寫本についても少し説明を加えておくと、P.2373は1行20字を超えるが、やはり均整に書かれている。S.5555が冊子本(圖1)であり、上圖4が折本であ

<sup>16</sup> 宇井伯壽「史的人物としての彌勒および無着の著述」(『印度哲學研究』第1卷、岩波書店、1965年)以來、無着がその說法を受けた彌勒は實在の人物であり、彌勒菩薩と區別する立場が多い。

<sup>17</sup> スタイン本と北京本の彌勒經典については、かつて金岡照光氏がまとめており、参考にした。参照：金岡照光「敦煌文獻より見たる彌勒信仰の一側面」『東方宗教』第53號、1979年、22-48頁。後、同『敦煌文獻と中國文學』(五曜書房、2000年)に轉載。

る。ともに1行17字ではないが、均整に書かれている。また、前者は『佛說壽命經』と、後者は『彌勒下生經』と併記されている。Dx1296は冊子本である。そして、注疏の2點は教學テキストとして用いられた痕跡があるが、それは注疏としての性質上、特に問題はない。

なお、P.3093「佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經講經文(擬)」(圖2)は、10世紀頃に講唱體で書かれた『上生經』講經の臺本である。朱點が打たれており、實際に使用された寫本と思しい。もともとこの講經の内容が敦煌で作成されたものか、四川等の外部地域から將來されたものの影響を受けたものかは分からぬが<sup>18</sup>、『上生經』の講經文が敦煌で講釋されたと考えてよいだろう。

ところで、敦煌文獻中の入藏文獻としては、18點の寫本が残されている<sup>19</sup>。そしてその中には、S.1519Vとは異なり、かなり詳しく入藏狀況を記録している寫本もある。しかし、S.1519Vを除く17點の中に、『上生經』、並びに『上生經』関連典籍の名は1點も見られない。これは、『彌勒下生經』等の彌勒經典の名が幾度か確認されている狀況と比較しても、些か様子を異にしている。

このように見來たると、敦煌文獻中、『上生經』は特に多くの寫本を残す經典ではなく、また何らかの特殊な性格が讀み取れる經典とも言い難い。その一方で、寫經の殘存狀況から考えるに、この經典は吐蕃支配期以前の唐代から曹氏歸義軍時代に至るまで、寫經が繼續されていたことが確認される。つまり、敦煌の複雑な時代變化の中でも変わらず利用され續けていた經典なのである。

それでは、寺院文書としては決して特別な位置にはなかった『上生經』がそのように存在し續け、且つP.3093のように10世紀に講釋された背景はどこにあるのか。この要因の1つとして想定されるのが、彌勒上生信仰との関わりである。

敦煌における彌勒信仰については既に金岡照光氏の論考に詳しい<sup>20</sup>。だが、金岡氏の論考では彌勒上生信仰と彌勒下生信仰とがそれほど明瞭に區別されていない。ここでは氏の論考に基づきながら、彌勒上生信仰の様相を見ていこう。

<sup>18</sup>敦煌文獻には、四川との関わりが指摘できる寫本が複数あり、兩地域の密接な關係が指摘されてきた。Victor H. Mair, *T'ang Transformation Texts*, Harvard University Press, 1989. 胡連利『敦煌變文傳播研究』、人民文學出版、2009年。他多數。なお、講經文の1つP.2292「維摩詰經講經文(擬)」にも、「廣政十年八月九日在西川靜眞禪院寫此第廿卷文書。」との識語あり、これが四川で作成されたことが分かる。廣政十年は西曆947年である。

<sup>19</sup>P.3807 + S.2079(龍興寺藏經目錄) P.3432(龍興寺供養佛經目錄) P.4039R+V(龍興寺藏經目錄) 北新876-1(靈圖寺藏經錄)の他、寺院不明經錄として、P.4664+P.4741、P.4664V、P.3060-2、P.3060V-1、Φ179、Dx965a+Dx965b、Dx1518、Dx2345 + Dx2353、北臨1633、北臨3739、北簡68105、北周42、北新869がある。注1『敦煌佛教經錄輯校』。

<sup>20</sup>注17。金岡照光『彌勒菩薩 中國における變容』『大乘菩薩の世界：金岡秀友博士還暦記念論文集』、佼成出版社、1988年、113-134頁。後、同『敦煌文獻と中國文學』(五曜書房、2000年)に轉載。

彌勒上生信仰は、死後に彌勒の住む兜率天への往生を願うものである。敦煌文獻では、9世紀半ば以降の寫本と思しいS.5433(冊子本)に、「南兜率天宮慈氏如來應正等覺，我今稽首，迴願往生，願共諸衆生往生彌勒國。」と書かれている。また、S.86「淳化二年馬醜女迴施疏」(西曆977年)では、「觀彌勒菩薩上生兜率天經八十部」が他の經典とともに、馬醜女なる人物の供養に轉ぜられたこと、並びに兜率天往生を願う文章が併記されている。これもまた、10世紀後半の敦煌に彌勒上生信仰が生きていたことの反映である。

その他にも、BD876V「大目犍連變文」に次の識語がある。冒頭の「太平興國二年」は西曆977年である。

- 130 太平興國二年歲在丁丑潤六月五日，顯德寺學仕郎揚願受一人恩微，  
131 發願作福，寫書此《目連變》一卷，後同釋迦牟尼佛壹會彌勒生作佛  
132 爲定。後有衆生同發信心寫《目連變》者，同池(持)願力，莫墮三途。

最後に三途を免れることを願っていることから、これは死後世界に関わる祈願を有する識語であると分かる<sup>21</sup>。彌勒信仰のうち、下生信仰は現世での彌勒による救済を祈願するものであることから、死後世界への願掛けをしているこの彌勒信仰は、上生信仰と関わるものと言える。

金岡氏も取り上げたこれら彌勒上生信仰の記述は、概ね9、10世紀頃の敦煌の姿を伝えるものである。しかし、ここで敦煌文獻以外の資料に目を向けると、『上生經』は、各地にわたって、民衆だけでなく僧侶にも一定の受容が繼續せられていたことが確認される。次に、『宋高僧傳』の中から幾つかの記録を見てみよう。

圓之修習，願見彌勒。一日講次，屹然坐終于法座，時衆聞異香裊香天樂爭聒，或絕或連，七日後已。此眞上生之證歟！（『宋高僧傳』卷第七「唐越州應天山寺希圓傳」<sup>22</sup>）

聞洛京三輔經論盛行，結侶求師，僅于十載，疏通性相，精大小乘，名數一支，因明一學，《俱舍》、《唯識》、《維摩》、《上生》，皆深藏若虛也。

（『宋高僧傳』卷第七「梁東京相國寺歸嶼傳」<sup>23</sup>）

日別誦《維摩》、《上生》，以爲恒課。（『宋高僧傳』卷第七「後唐洛陽長水令誦傳」<sup>24</sup>）

<sup>21</sup> なお、「目連變文」が葬儀と関わる可能性が高いことも先行研究に詳しい。荒見泰史「敦煌文獻に見られる『目連變文』の新資料——北京8719號文書について」『東方宗教』第103號、2004年、61-77頁。注6「敦煌の喪葬儀禮」。

<sup>22</sup> 宋贊寧撰、范祥雍點校『宋高僧傳』、中華書局、1987年、141頁。

<sup>23</sup> 同上、143-144頁。

<sup>24</sup> 同上、145頁。

時受講當《上生經疏》序。至「若洪鐘而虛受」，受捨塵柄言曰：「某得名無典實。今後更爲虛受。小子識之。」（『宋高僧傳』卷第七「後唐會稽郡大善寺虛受傳」<sup>25</sup>）

重要な點は、これらの記録がいずれも唐代後期から五代・宋初にかけてのものであることだ。希圓は西暦895年、歸嶼は936年、令諲は935年、虚受は925年に他界している。そして、上生の證をこの世に現出させた希圓や、『上生經』の注疏に感じるところのあった虚受の姿からは、上生信仰を強く持つ高僧の姿が窺われる。また、歸嶼と令諲の傳からは、『上生經』が『維摩經』とともに習學されていたことも分かる。『上生經』の流布が、敦煌文獻に確認される如き死後世界との関わりの中だけでなく<sup>26</sup>、高僧の強い信仰対象となり、また習學される側面もあったのである。

また、『上生經』は梵本が見当たらず、西域で編纂されたとも考えられている經典である。その地理的條件を考慮すれば、彌勒上生信仰が流布する下地が敦煌に存在していたと見ることは十分可能である。ただ、上記『宋高僧傳』の幾つかの記録に従うならば、敦煌文獻に伝えられた民間における上生信仰は、必ずしも敦煌特有の信仰であったわけではなく、中國全體に一定の信仰を得ていた上生信仰の民間層における表れと考えられるのではないだろうか。S.1519Vに見られる『上生經』の記述は、通常の入藏録には記されていない當時の中國における上生信仰の一面を示すものと言えるだろう。

このように、S.1519Vに記された佛教典籍の名稱は、金剛醜女のお話や『彌勒上生經』等、敦煌講唱體文獻の内容にも繋がるものであり、中國に廣く共通した信仰の一端を示すものと言える。

#### 4. 「閻羅十王變」（18行目）

S.1519Vと講唱體文獻との連絡を考えるにあたり、もう1點着目すべき文獻名が、18行目の「《閻羅十王變》一」である。これは、『佛說閻羅王授記四衆預修生七往生淨土經』（以下、『十王經』）に関する文獻である。『十王經』は、他の講唱體文獻のように俗語や口語語彙を用いていないものの、その偈の利用や繪畫との関わりにおいて、多くの研究者から變文との近似性が指摘されてきた經典である。

この『十王經』の偽經的性格や儀禮との関わりについては、既に数多くの先行研究があるため<sup>27</sup>、本稿での再説は控える。本稿で着目する特徴は、敦煌文獻中に

<sup>25</sup>同上、146頁。

<sup>26</sup>S.5433にも『佛說延壽經』が併記されている。

<sup>27</sup>なお、この經典は藏川述と書かれており、藏川譯とは書かれていない。この點も、『十王經』が偽經とされる所以である。杜斗城『敦煌本佛說十王經校録研究』、甘肅教育出版社、1989年。吉川

40 点を超える寫本が見つかっており、且つ様々に書き換えられていたにも関わらず、いずれの『十王經』の寫本にも「變」と書かれていないことである。周知の如く、『十王經』の寫本には、P.2003 のように、經文の間に繪畫を挿入する寫本が複数存在している。よって、繪畫との関わりから、『十王經』寫本に「變」との名稱が冠される寫本があっても不思議はなかったはずである。

この事實から導き出されるのは、S.1519V にいう「《閻羅十王變》一」とは、現存する幾種類かの『十王經』寫本とは異なる特徴を有する文獻であったことである。そしてそれは、變という文字に着目すると、『十王經』の畫であると考えられる。變文の變の字義については、これまで様々な見解が出されてきたものの、繪畫との意味において考えるのが最も妥当な解釋と考えられる<sup>28</sup>。P.2003 のように經典の本文が書かれたものではなく、變相畫の如き繪畫だったのではないだろうか。

次の問題は、「一」の意味である。「閻羅十王變」が變相圖の如き繪畫と考えられる以上、この「一」は、「一卷」ではなく「一鋪」の意味と見做すことが適切となる。「鋪」が繪畫に関わることは、既に先行研究において明らかにされてきた通りであり<sup>29</sup>、例えば同じ敦煌出土の引路菩薩圖にも「鋪」の字は確認される。ただ、水谷眞成氏がかつて指摘したように、鋪は「從來考えられていた如きたゞ一枚の繪畫をいうのではなく、何枚かでなつている一「組」の掛圖を示すもの」<sup>30</sup>である。實際、『十王經』は、十王の審判ごとに繪が描かれることもあり、複数からなる一組の繪としての性格にも合致する。

先述の如く、この『十王經』は、早くから偽經との判断が下されてきた經典である。それ故に、實際に寺院に收藏されていた場合でも、通常の入藏録にはその名が確認されることはなかった。この點に着目するならば、S.1519V が實際に收藏されていた多様な文獻を列擧した目録であることによって、我々はその收藏狀況の一端を知り得たと言える。ここにも當該文獻目録の意義が見出されるであろう。

ところで、S.1519V には、これらとはまた異なる考察を要する經典の名が確認される。次章では、特に 10 世紀敦煌における經のあり方を考えてみたい。

忠夫『唐代の宗教』「II 佛教と道教のあいだ」小南一郎「『十王經』をめぐる信仰と儀禮 生七齋から七七齋へ」、2000 年、朋友書店、159-194 頁。荒見泰史『敦煌講唱體文獻研究』「第三章 關於地藏十王成立和演變的若干問題 以敦煌寫本與大足石窟地獄變龕爲中心」、中華書局、2010 年、159-195 頁。玄幸子「『閻羅王授記經』寫經考 天堂へのパスポート」『敦煌寫本研究年報』第 6 號、2012 年、203-218 頁。他多數。

<sup>28</sup> この問題に對する議論はいまなお盛んである。變を繪畫との関わりにおいて捉える見解は、次の論文に詳しい。梅津次郎「變と變文」『國華』第 760 號、1955 年、191-207 頁。

<sup>29</sup> 水谷眞成「「一鋪」の意義について 變文演出法に關する一試論」『支那學報』第 2 號、1957 年、29-32 頁。後、同『中國語史研究 中國語學とインド學との接觸』(三省堂、1994 年)に轉載。

<sup>30</sup> 同上。

### 第3章 S.1519Vの詳細不明な經典と10世紀敦煌における「經」

S.1519Vのうち、『佛說耆婆治病經』(6-7行目)は、いかなる經典であったか分からない。耆婆を主題とする經典を考えると、安世高譯『棕女耆域因緣經』の名が挙げられるが、その異稱にも比定し得る名稱は確認できない<sup>31</sup>。

また、「佛八十相好」(13行目)なる典籍の名も確認される。しかし、これを「八十種好」と読みかえても比定し得る典籍が見当たらない。よって、これが佛教經典であるのか、佛の八十種好に関する論の如き文獻なのかも不明である。

『彌陀念佛讚經』も疑問を抱く名稱である。讚は佛菩薩を褒め稱えるものであり、通常經と呼ばれることはない。確かに、『出三藏記集』には竺法護譯『光讚經』や同譯『生經』を抄出した『雜讚經』が確認され、他にも曇無讖譯『佛所行讚經』も存在していた。しかし、それらは概ね古譯時代かそれをあまり隔たらない時期に確認される名稱である。恐らくは、翻譯語が一定しない時期に使われた言葉であろう。『法經錄』に、『七處三觀經』より抄出した經典として『地獄讚經』一卷の存在が確かめられるが、これには「經後別有地獄讚，非此經類。」との文言がある。つまり、當時既に讚と經の區別が意識されていたことが分かるのである。

ここで『彌陀念佛讚經』なる名稱を残すS.1519Vが10世紀文獻であることを考えると、まず想起されるのが、法照の淨土五會念佛が廣く流布していたこととの關連である<sup>32</sup>。彼の著作に多數の讚が確認されることは既に知られており、ここにいう『彌陀念佛讚經』もその流れを汲むものと考えるのが妥當であろう。ここで、讚という名稱に意識を向けるならば、『彌陀念佛讚經』とはあくまで讚と見做すべきものであり、本來『彌陀念佛讚經』は經と呼ぶべき典籍ではなかったはずである。

これらの詳細不明な典籍については、偽經の角度からも考察を加えることができるであろう。先學の指摘にもあるように、偽經には幾つかの生成目的があり、政治的意味合いを持つものや、佛教流布を目的とするもの等、様々であった<sup>33</sup>。また

<sup>31</sup>異稱には、棕女祇經、祇域因緣經、棕女祇域經、棕女經などがある。

<sup>32</sup>塚本善隆『唐中期の淨土教 特に法照禪師の研究』、法藏館、1975年。佐藤哲英「法照和尚念佛讚について(上)」、『佛教史學』第3巻第1號、1952年、42-64頁。同「法照和尚念佛讚について(下)」、『佛教史學』第3巻第2號、1952年、38-48頁。齋藤隆信「法照禮讚偈における通俗性 その詩律を中心として」、『淨土宗學研究』第30號、2003年、15-100頁。荒見泰史「淨土五會念佛法事」與八關齋、講經」、『政大中文學報』第18期、2012年、57-86頁。

<sup>33</sup>かつて牧田諦亮氏は、疑偽經典の作成目的を考察し、1)主權者の意に副わんとしたもの、2)主權者の施政を批判したもの、3)中國の傳統思想との調和や優劣を考慮したもの、4)特定の教義信仰を鼓吹したもの、5)現存した特定の個人の名を標したもの、6)療病迎福などのための單なる迷信に類するもの、という6つの分類を行っている。牧田諦亮「中國佛教における疑經研究序説

敦煌出土疑經類をめぐって」、『東方學報』第35冊、1964年、337-396頁。後、同『疑經研究』(京都大學人文科學研究所、1976年)に轉載。

10世紀敦煌には、それらとは異なり、もともと經典ではなかった文獻が經典として扱われる状況が生まれていた。例えば、BD876V「大目犍連變文」の識語より（第2章3.『上生經』参照）10世紀後半には、「目連變文」の如き俗文學の文獻に對し、本來ならば經典に附すべき願文が書寫されていることも分かっている<sup>34</sup>。

確かに、このような状況を踏まえ、當時の經典への意識の變化を知ることは重要な課題である。しかし、本稿ではそれ以前の問題として、本来は經典ではなかった典籍が經典にまで高めて扱われる状況を、より具體的に見ていきたい。先に結論を述べると、10世紀頃の敦煌文獻に謂う所の經とは、元來は經典ではなかった文獻が含まれると考えられるのである。『佛說耆婆治病經』や『彌陀念佛讚經』等の名を記したS.1519Vが、10世紀頃の敦煌で書寫された收藏文獻である以上、兩經典が元來經典ではなかった可能性を考えることが必要なのではないだろうか。よって、以下にこのような見解に至る背景、及び10世紀敦煌における經のあり方を見ていくこととする。

#### 1. P.2999「太子成道經」に見る經

まず、講唱體文獻でもあるP.2999「太子成道經」を取り上げる。

P.2999

Recto：太子成道經

首題：無

尾題：無

存：152行

Verso：太子成道經 / 雜寫

太子成道經（承 Recto）

首題：無

尾題：57太子成道經壹卷

存：59行

雜寫

首題：無

尾題：無

存：14行

解説：末尾に「成道經壹卷 [ 提 ] 波 ( 婆 ) 達多」とある。卷子状態にした時、この文字が上に表れる。

<sup>34</sup>金岡照光編『講座敦煌9 敦煌の文學文獻』I 總説 敦煌文學の諸形態」金岡照光「二《講唱體類》(二)變文類 12 變文講經文の識語より見た作成の意圖」、大東出版社、1991年、151-159頁。

「太子成道經」との名稱がある一方、「成道經」とも書寫されている。講唱體や俗語を交えて書かれており、梵文から翻譯された經典としてあるべき文章を用いた文獻ではない。換言すれば、釋迦の金言である經典と呼ぶべき文獻でないことは既に明瞭である。もう1點この問題とともに注意すべき箇所がある。それは、以下の如き語句解釋である。(28行目にいう兜率陀天は兜率天に同じ。)

28 道。何名兜率陀天？ 兜名小欲，率名知足，小欲[知足]號

29 曰兜率陀天。三無數劫中，積修萬行，施[捨]頭目髓

30 腦實甚難。(以下略)

ここで着目したいのは、「兜率」を「兜」と「率」とに分けて一文字ずつ行なわれる語句解釋の方法が、通常は經文の注疏の中で行われる点である。これは、例えば『妙法蓮華經』の5つの文字にいかなる意味が含まれているかという經題解釋でも行われる。

つまり、「太子成道經」はもともと經典ではない典籍に經という名を冠したのみならず、本来ならば經典の注疏の中で行われる語句解釋が、本文中に施されているのである。このことは、「太子成道經」が他の眞正な經典の如くに扱われていること、つまり、本来經ではなかった文獻が、經と同列に扱われていることを意味している。これは裏を返せば、經の絶対性が犯されていることを意味している<sup>35</sup>。それは、先の章にも取り上げたBD876「大目犍連變文」が經典の如く願文を附して寫經されたことや、同じく講唱體文獻であるS.2614V「大目乾連冥間救母變文一卷并序」が張保達によって經典の如く保管されていたことに通じる問題とも言える<sup>36</sup>。本来佛教經典とは釋迦の金言であり、書き換えなどの改變を行うことは決して許されていなかったはずであるのだが、そのような意識が10世紀頃には揺らいでいた姿が窺われる。續いて、これとは異なるもう1つの經の揺らぎの例を見よう。

## 2. Φ223「十吉祥」と慈恩大師の注疏

ここではΦ223「十吉祥」に着目し、經典ではない典籍が經典的扱いを受けたと思われる状況を見ていきたい。寫本の書寫情況は以下の通りである。

<sup>35</sup>このような傾向は非講唱體文獻の佛教因緣譚にも若干確認される。9世紀半ば以降の文獻と思しいBD3578は、非講唱體で書かれた3點の本生譚を書寫している。そのうち2點の本生譚は、『賢愚經』の文章を小説的な文體で書き換えており、釋迦の金言であるはずの經の絶対性が犯されている。拙稿「縁起類發展史考」『第2回東アジア宗教文獻國際研究集會論文集「唱導、講經と文學」報告書』、廣島大學敦煌學プロジェクト研究センター、2013年、378-396頁。

<sup>36</sup>S.2614Vの識語に「張保達文書」と書かれており、張保達の文書として保管されていたと考えられる。

Φ223

Recto：十吉祥

首題：無

尾題：無

存：94行

解説：講唱體

Verso：無

存：1行

解説：「十吉祥」の3文字が左端に書かれる。

「十吉祥」の内容は、文殊菩薩を主題とした講唱體文獻であり、文殊菩薩の10の名前を述べて講釋している。冒頭は次のようにある。

Φ223「十吉祥」

- 1 文殊師利，此云妙德；正梵語云曼殊室利，此云妙
- 2 吉祥。法王子者，從佛口生，從法化生。佛爲法王，人爲
- 3 法子，彼菩薩堪紹聖種，故名法王子。何以名爲（妙）
- 4 吉祥？此菩薩當生之時，有十種吉祥之事。準《文
- 5 殊吉祥經》云々。（以下略）

この後、文殊菩薩の10の名稱である光明滿室、甘露垂庭、地涌七珍、倉變金粟、象具六牙、猪誕龍肫、鷄生鳳子、馬産騏驎、神開伏藏、牛生白澤が順に挙げられ、それぞれ講唱體で解説されていく。

このような「十吉祥」は、その冒頭に『文殊吉祥經』に依拠したと明記されている（4～5行目）。だが問題は、その『文殊吉祥經』なる經典が、『佛說耆婆治病經』のように詳細不明な文獻であることだ<sup>37</sup>。「十吉祥」については、先行研究でもその名稱の由來や典故が考察されてきたが<sup>38</sup>、未だその經典の特定には至っていない。

このような特徴から當該經典を僞經と見做すことは難しくない。だが、その成立過程を考えたとき、一般的な僞經とは異なる成立過程を有する可能性がある。卑見によれば、當時『文殊吉祥經』なる經典が實在していたと假定しても、それはもともと經典であった典籍なのではなく、慈恩大師撰『阿彌陀經通贊疏』から作り上げられた典籍だったのではないだろうか。

<sup>37</sup>「十吉祥」の翻譯解説でも、その典拠となった經典は佚譯とされている。福井文雅・松尾良樹他譯『大乘佛典』中國・日本 第10卷「敦煌I」、中央公論社、1992年、466-467頁（松尾氏の解説部分参照）。

<sup>38</sup>項楚・鄭阿財主編『新世紀敦煌學論集』李誠「《十吉祥》研究」、巴蜀書社、2003年、126-143頁。

まず、筆者の想定する「十吉祥」の來源となった『阿彌陀經通贊疏』の文章は、以下の通りである。

梵云曼殊師利，此云妙吉祥，生時有十種吉祥事故：一、光明滿室；二、甘露盈庭；三、地涌七珍；四、神開伏藏；五、鷄生鳳子；六、猪孩龍肫；七、馬産騏驎；八、牛生白驛；九、倉變金粟；十、象具六牙。故云妙吉祥也<sup>39</sup>。

「十吉祥」とは各名稱の順序や文字に異同があるとはいえ、内容上、ここに「十吉祥」との繋がりを見るのは可能であろう。ただ、文殊菩薩の各名稱を有する文献は、例えば唐・澄觀述『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』<sup>40</sup>もある。よって、この記述だけでは「十吉祥」と『阿彌陀經通贊疏』との直接關係を肯定するには十分ではない。

ここで考えるべきは、現在講經文と總稱される講唱體で書かれた經典講釋の文献群が<sup>41</sup>、慈恩大師との關係が極めて強いことである。佛教經典を講唱體で語る時、慈恩大師の注疏が有力な依拠資料であったことに變わりない。これは夙に平野顯照氏が指摘してきたことであり<sup>42</sup>、例えば「妙法蓮華經講經文（擬）」の1つP.2305には次のようにある。

P.2305 「妙法蓮華經講經文（擬）」

- 91 經：「王聞其語，歡喜踊躍，即便隨仙，  
92 供給所須，採果給（汲）水，拾薪設食，  
93 乃至以身，而爲床座。于時奉事，  
94 經於千歲，爲於法故，精勤給侍，  
95 令無所乏。」  
96 此唱經文慈恩疏科有二：「初難行能  
97 行，後難事能久。」于時奉事，

この96行目にいう慈恩大師の注疏とは、『妙法蓮華經玄贊』を指している。

他にも講經文と慈恩大師の注疏が繋がる例を挙げると、P.2133「金剛般若經講經文（擬）」は慈恩大師の『金剛般若經贊述』に依拠したことが知られている。

慈恩大師の注疏が廣く世に行われたことは、『宋高僧傳』の彼の傳にも記されて

<sup>39</sup> 『大正藏』第37卷、337頁a。

<sup>40</sup> 『大正藏』卷36第、520頁a。

<sup>41</sup> 講經文の一般的な形式は、1) 經文の引用、2) 散文によるその解釋、3) 韻文による詠いから成る。

<sup>42</sup> 平野顯照「敦煌本講經文と佛教經疏との關係」『大谷學報』第40卷第2號、1960年、21-32頁。同「敦煌本講經文と佛教經疏との關係（續）」『大谷學報』第41卷第2號、1961年、28-38頁。

おり<sup>43</sup>、またその死後も、9世紀半ばの長安佛教に大きな影響を持っていたことが、圓仁の『入唐求法巡禮行記』にも記録されている<sup>44</sup>。10世紀の敦煌講經文がその流れの上にあることが推察されるとともに、敦煌の講經文が敦煌独自のものではなく、長安佛教等の影響を受けたものとも言えるだろう<sup>45</sup>。

このような慈恩大師と講經文との関わりの中で注目しておきたいのは、筆者が「十吉祥」との関わりを想定する慈恩大師の『阿彌陀經通贊疏』が、やはり P.2955「阿彌陀經講經文(擬)」と密接な関係にあることである。このことは、当時『阿彌陀經通贊疏』に依拠した講經文が存在したことを示しているからである。

講唱體で經典を解説する講經文と慈恩大師の注疏の関わりが深く、更には「十吉祥」の内容が慈恩大師の注疏と近いものである以上、「十吉祥」が基づいたと記す『文殊吉祥經』の由來を考えるにあたっては、『阿彌陀經通贊疏』を想定することは適切である。そもそも、慈恩大師は玄奘の右腕として活躍した人物である。その注疏に典拠となる經典として『文殊吉祥經』の名が挙げられていないことは、それが何らかの經典に直接由來する名稱ではなかった可能性が考えられる。つまり、『文殊吉祥經』なる經典が實在した可能性がここでも薄くなるのである。

附言すると、先に挙げた圓仁と同じく9世紀半ばに入唐した圓珍は、その著『菩提場經略儀釋』<sup>46</sup>の中で、文殊菩薩の上記の名稱を列挙している。しかし、そこでもやはり、出典となった經典の名稱も、『文殊吉祥經』なる名稱も確認できない。このこともまた、文殊菩薩の10の名稱の由來を考えるにあたって、『文殊吉祥經』なる經典の實在を想定することの難しさを示唆している。

### 3. S.1519Vの不明な經と10世紀の疑偽經典

さて、以上の P.2999「太子成道經」と Φ223「十吉祥」における經のあり方から考えられるのは、10世紀の敦煌文獻を考える際には、經という名稱が冠されていても、それが釋迦の金言としての佛教經典であると言い切るには些か慎重にならねばならないことである。これは、當時の敦煌において、従來とは異なる佛教經典への意識が芽生えていたことを意味しており、繰り返せば、釋迦の金言として存在していたはずの佛教經典は、その絶対性が犯されていたことを意味している。

先學の指摘にもあるように、佛教が傳來して以降、中國ではかなり早い時期が

<sup>43</sup>注 22、63-66 頁。

<sup>44</sup>鈴木學術財團編『大日本佛教全書』第 72 卷(史傳部 11)圓仁撰『入唐求法巡禮行記』卷第 3、1972 年、120 頁。

<sup>45</sup>ただし、敦煌以外の地域における講唱體講經文の利用開始時期、及びその流布の程度は分かっていない。また、慈恩大師の注疏を用いた法會が傳世文獻に確認されても、それが敦煌文獻のような講唱體を用いたものであったかどうかは別に考察を要する問題である。

<sup>46</sup>『大正藏』第 61 卷。

ら偽經が作成されていた<sup>47</sup>。そこには眞經と區別できぬよう何らかの細工を施される場合もあった。それ故に、當時においてさえそれらが偽經か否かの判断が容易でなかったのである。

しかし、この10世紀における經への意識は、それら従來の一般的な偽經とは性質を異にしている。講唱體で書かれた場合が典型的であるように、經典としての絶對性を犯す文體の利用や經典ではなかった文獻を經と呼ぶ行爲は、それ程忌避されていない。

それでは、S.1519Vに見られる『佛說耆婆治病經』や『彌陀念佛讚經』について考える際に必要な認識とは、いかなるものであろうか。第2章に見たように、S.1519Vに列擧された文獻は、10世紀の講唱體文獻に繋がる特徴を垣間見せていた。また、P.2999「太子成道經」やΦ223「十吉祥」のような文獻の特徴を踏まえると、S.1519Vに書かれた『佛說耆婆治病經』や『彌陀念佛讚經』を考えるに当たっても、本來經典と見做すべきではない文獻であった可能性を考えておかなければならないと言える。

#### 第4章 S.1519Vの特徴

ここまで、S.1519Vと10世紀敦煌講唱體文獻との関わり、並びに經と呼ばれる典籍の變容について考えてきた。

この寫本に書かれた經の如き詳細の分からぬ經典は、印刷の未だ全国的に流布していない當時は幾らでも存在していたはずである<sup>48</sup>。確かに、詳細が分からぬということそれ自體では、その典籍を疑偽經典とみなす十分條件となるものではない。だが、本稿で見た經について言うならば、講唱體で書かれていることをはじめとし、明らかに釋迦の金言ではない文獻であった。『十王經』の如く流布した文獻もあったとはいえ<sup>49</sup>、中原にも知られていない經典は他にも多數敦煌に存在していたはずであり、そのような狀況が敦煌に限られることであったとも考えられない。

このことは、冒頭にも記した狀況と関連するものである。國家が衰退し、中央の影響が地方にまで及ばなくなると、地方寺院にとっては『大唐内典録』や『開元

<sup>47</sup>釋道安の時代にも既に疑偽經典が多數存在していたことが、道安の『綜理衆經目錄』を受けた僧祐撰『出三藏記集』に確かめられる。佛誕二千五百年記念學會編『佛教學の諸問題』深浦正文「偽經の意義」、1935年、岩波書店、882-897頁。

<sup>48</sup>牧田氏は、ほとんどの疑偽經典が消滅した原因に、印刷の普及が大きく作用した可能性を指摘する。注33参照。

<sup>49</sup>敦煌文獻以外では、司空圖の「十會齋文」に十王信仰との関わりや『十王經』が存在した可能性が指摘されている。塚本善隆「引路菩薩信仰と地藏十王信仰」『塚本善隆著作集 第七卷』、大東出版社、1975年、315-399頁。

釋教録』のような國家の軌範的經録に副う經典の收藏は困難となる。また、寺院内での教學や法會の遂行にあたって、手元にある經典か、近隣地域から取り寄せられる經典に頼る場合が多くなる。このような狀況が繼續すればするほど、本來理想とすべき經典の收藏が困難となり、地方ごとに異なる收藏狀況が生まれ、それぞれに異なる佛教のあり方が生まれてしまう。當然、そのような狀況下で經典の偽造が行われたならば、それは、その偽造を行なった地方の特色を窺うには重要な資料となるが、それは中原や他地域における入藏狀況を推察するに足る資料とはならない。これは、隋代以前の國家が分裂していた時代に作成された様々な入藏文獻の目録に共通する問題であり、S.1519Vの限界もまたここにあるのだろう。

## 小結

敦煌は、8世紀後半以降、曇曠や法成の影響下に独自の佛教史を作り上げてきた。70年近く吐蕃支配期が續いたとはいえ、もし9世紀半ばから始まる歸義軍時代の敦煌が半獨立状態にはならず、また唐も衰退や廢佛、滅亡がなかったならば、敦煌はもっと長安佛教の流れに副う歴史を歩んだのかもしれない。だが実際には、敦煌では歸義軍時代以降も完全には長安佛教の流れに組み込まれず、独自の歴史を作り上げていった。その影響もあったからこそ、10世紀の法會において、中原の皇帝以上に歸義軍の曹氏一族こそが佛法を體現した爲政者として位置づけられていたのではないだろうか<sup>50</sup>。

S.1519Vは、文獻名を列挙する斷片的な收藏文獻目録ではあるが、10世紀において書寫されたという時代背景を考えることで、當時の敦煌佛教界の特徴を反映した内容を残していると言えるだろう。

(作者は廣島大學特別研究員)

<sup>50</sup>赤木崇敏「十世紀敦煌の王權と轉輪聖王觀」『東洋史研究』第69卷第2號、2010年、59-89頁。

行願經一卷 華嚴經一卷  
 一行經五卷 卷一 又經五卷 卷二  
 法苑珠林一卷 雜錄 卷一  
 寶鏡經一卷 卷一  
 能頂尊經一卷 卷一  
 雜寶藏經一卷 卷一  
 經一卷 卷一  
 六門陀羅尼經一卷 卷一  
 華嚴經疏義門學經九日卷一

上生抄上卷 卷一  
 能事天合神 卷一  
 雜字經一卷 卷一  
 經一卷 卷一  
 寶母圖一卷 卷一  
 石法要法及接尾 卷一  
 大句頌并因行論 卷一

S. 1519

圖 3 : S.1519V 「寺院收藏文獻目錄 (擬)」